

アクティブ・ラーナー育成をはかる組織的取組 —授業改善スキームの構築—

県立広島大学

馬本 勉・田中 聡・伊藤 俊・和泉佳歩

1. はじめに

平成26年度にテーマ I 「アクティブ・ラーニング」でAP事業に選定されて以降、県立広島大学の教育改革は新たな局面を迎えた。本ポスター発表では、この5年半に取り組んできたアクティブ・ラーナー（ALer）育成のための「授業改善スキーム」の全体像を紹介する。

2. 県立広島大学型アクティブ・ラーニング（CLAL）の導入・普及

県内3つのキャンパスは、それぞれ約100キロ離れている。この物理的かつ心理的距離を縮める方策が「行動型学修」であり、専門の異なる学生が一同に会する、または各キャンパスを拠点に地域へ出かけることをアクティブ・ラーニングの一形態とした。もう一つは「参加型学修」。こちらはグループワークやプレゼンテーションなど、教室内の相互作用を重視した。これらキャンパス内外で繋がる能動的な学修（Campus Linkage Active Learning: CLAL）を県立広島大学型アクティブ・ラーニングと呼ぶが、こうしたAL手法の導入によって、授業外学修時間の伸びが見えてきた。

3. ファカルティ・ディベロッパー（FDer）の養成

AL推進を牽引するファカルティ・ディベロッパー（Faculty Developer: FDer）となる教員の研修を重ねてきた。様々な手法を学び、各自の実践を紹介し合う研修の場を設けるとともに、授業を互いに公開・参観するピアレビューを取り入れた。さらに研修の一環として、ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを継続している。自己を省察し、改善に向き合うFDerは着実に増加している。

4. 学修支援アドバイザー（SA）の養成

学生の学びを支援する学修支援アドバイザー（Study Adviser: SA）となる学生に対し、FDer教員による研修と面談を継続している。ラーニングコモンズでの学修支援や、参観者として授業に関わるSAは、ALerとしての意識を高め、他の学生に範を示す。教員・職員・学生の協働によるミーティングでも堂々と意見を述べ、教育改革の一翼を担ってくれているのは頼もしい。

5. 高大接続改革の取組

本学AP事業と時を同じくして、広島県教育委員会から「学びの変革アクション・プラン」が発表された。その目標には我々との共通点も多いことから、中等教育から学ぶ機会を模索し始めた。平成28年度から毎年、県教委との共催による合同発表会を開催し、双方の実践と成果を紹介し合っている。ポスター発表で意見交換が弾み、高大の連携が生まれた例もある。今年度は「探究」をテーマに、大学生と高校生も登壇者としてパネルディスカッションに参加し、活発な議論を交わした。

6. 学修成果の可視化

AL実践を重ねるにつれ、成果の可視化を求める声が大きくなった。ルーブリックの導入が徐々に進み、授業後の成長や、学期毎の伸びを測定する自己評価ルーブリックの開発へと結びついている。

7. 教・職・学の協働 —研修体系とその具体化—

授業ピアレビューに参画する教員・職員・学生の3者によるミーティングを契機に、ALer育成のための教職員研修体系を策定する機運が高まり、ワーキンググループが立ち上がった。検討を経て構築した体系をポスターに図示している。今年度より、体系の具体化が徐々に進み始めている。

8. おわりに

CLAL, FDer, SAの3本柱でスタートした本学APは、さらに高大接続、成果の可視化、教職学協働という3つを加えて継続中である。これら6つによってALer育成の「授業改善スキーム」は構成され、その有機的・組織的な展開が教育改革を支えている。「課題探究型地域創生人材」という新たなALer像を追求する学部再編も4月に迫った。APの歩みを背景に、新たな県立広島大学が動き出す。